

入選

世界との出会い～ありがとう、どういたしまして～

千葉県 中部小学校

五年 松村 遙

今年は、コロナの影響で、無観客での開催となってしまったオリンピックだけれど、家からあまり出られなかったこともあり、家で毎日のようにオリンピックを観戦していました。オリンピックを見ていて、人と人の助けあいや、感謝の気持ちが表れているなど思ったできごとをいくつか知ることができました。

まずはじめは、外国人記者が、日本人警備員に感銘を受けたというニュースです。海外メディアは、日本の警備員に注目し、

「これほどプロフェッショナルな警備員は見たことがない。」

と絶賛の声があがったそうです。ある外国人記者は、

「これほどテキパキしていて、スムーズ、プロフェッショナル、用意周到、そしてほかにないほどフレンドリーな警備員を日々、そして何度も見るというのは経験したことがない。」

と紹介しました。それに対し、他の外国人記者も反応し、

「彼らはすばらしい。猛暑の夜中二時でもバス停でほほえみかけてくれるなんて、ここ以外にいるのかしら。彼らはそれをやってくれる。」

と深夜まで仕事をこなす警備員の存在を紹介しました。ぼくは、警備員のような、あまり目立たないようなところでも、オリンピックをうらで支えてくれている人たちに、とても感動しました。

警備員の人たちはきっと、自分の仕事をやりとげようとしただけで、感謝してもらおうとは思っていなかったと思うけれど、こんなふうに、自分のことを見て感動してくれる人たちがいたことを知ることができて、うれしくなったのではないかと思います。

次に、いくつかの場面で、日本に対する感謝の気持ちを目にすることができました。選手村に飾られていた横断幕に、「心より感謝いたします」「THANK YOU」と書かれているのを見たり、競泳の男子400メートルメドレーリレーで金メダルをとったアメリカチームが、表彰式後、「THANK YOU TOKYO」と書かれた青いフラッグを掲げ、場内を歩いているのを見たりしました。

閉会式でも、日本国旗を手に持った選手や、背中にカタカナで「ドイツ」と書かれたジャケットを着て登場している選手もいました。これを見て、感謝の気持ちを表すことの大切さを感じました。それは、言葉で伝えることはもちろん、横断幕や国旗をふってくれたように、言葉ではなく、態度で気持ちを示すこともできると思います。相手に気持ちが伝われば、伝えられた人もうれしくなると思います。

そのような、「ありがとう、どういたしまして」の気持ちのやりとりは、本人だけでなく、見ている人も、気持ちが温まる気がします。なので、自分も、感謝の気持ちを積極的に表せるようになりたいと思いました。

コロナウィルスの感染が続く不安の中のオリンピックだからこそ、より感謝や気づかいの大切さを感じることができた気がしています。